

2. 日本文化史（2） 中世の文化

さて、中世文化史です。鎌倉と室町では、同じ中世文化史と言っても共通点と相違点がありますし、雰囲気もずいぶん違うように思えるのですが、皆さんはどうでしょうか？
鎌倉文化の場合は、まず、仏教をきちんと押さえてください。特に受験生の人たちには必修ですね。別に宗教系（キリスト教・仏教・神道・新興宗教）大学でなくても、よく出題されます。第一に僧侶の名前を漢字で書かされたりします。気をつけてください。

1. 鎌倉文化

①鎌倉文化の特色

この時代の文化は、伝統的文化の継承者である貴族たちの文化と、新たに台頭してきた武士・所民たちの文化の二面性を持つ文化であった。さらに、従来の唐文化に対し、宋の文化の影響を受けたことに注目すべきである。

②仏教

平安時代末から相次ぐ飢饉、戦乱、仏教界の腐敗・墮落は、人々に末法の世の到来を感じさせることとなった。人々は新たな救いを求めるようになり、これに応じて新たな仏教教団が誕生することになる。但し、誤解してはいけないことは、いわゆる新仏教教団は、この時代には、少数派・異端派であり、圧倒的な勢力を持っていたのは、南都六宗の教団や天台・真言といった密教教団である。これらの教団を総称して**顕密仏教**（教団）という。一般に、新仏教教団の特徴は、易行（修行が簡単）・選択（数ある経典のうち1つで良い）・専修（それだけにすれば良い）の3つだとされている。

◆鎌倉仏教についてのかなり深めの説明

（受験生は読む必要はありませんが、本当はこういうことです。入試には出ませんから、読み流していいです。このあたりが、受験日本史<教科書に書かれた内容>と研究としての日本史の違いです。私は時間にゆとりがあれば、教えていましたが。）

○鎌倉仏教は、鎌倉旧仏教と新仏教という分け方はしない。

○上記した「新仏教教団は、この時代には少数派・異端派である」という記述は、『受験・日本史 B』（文永堂）にも「鎌倉新仏教と旧仏教」で記されていて、きちんと教材研究をしている先生は、そうした内容で教える方もいる。少数派・異端派である新仏教教団が寺院数・信者数をいわゆる旧仏教教団を上回るようになるのは、室町時代になってからである。

(1)鎌倉仏教の主流派「顕密仏教」とは？

現世主義（民衆に豊作を祈るなど）と来世主義（年貢を領主に納めると往生できる）が交じり合ったものである。南都仏教、天台・真言の仏教（教団）を総称して顕密仏教という。

(2)「顕密仏教」の思想的基盤

本覚思想とよばれるもの。これは、自分が成仏していることを直感的に感知すれば良いとするもの。別言すれば、国土をはじめすべてのものが、成仏しており、それがわからないのは、認識の仕方が悪いという考えであり、あらかじめ成仏が約束されているのだから、それを感じればそれで成仏できるという考え方につながる。最初から成仏できることが分かっているなら、修行など必要なくなるし、戒律を守る必要もないということで、戒律無視、欲望の即時肯定になる。

(3)「顕密仏教」の僧侶の役割

僧侶になるためには、出家し得度し、国家的寺院（延暦寺・東大寺・東寺など）で国家的な儀式（法会）に参加する。→鎮護国家のための僧侶

(4)「顕密仏教」に対する批判

(2)の本覚思想で見たように、欲望肯定・戒律無視で、成仏が予め決まっております、それを直感すれば良いという顕密仏教では、この世を救済できないと考えるグループができていく。何故なら、治承・寿永の内乱後、国土の荒廃が眼のあたりのものとなったからである。相次ぐ飢饉・合戦で人々は死に、死体はあちらこちらにごろごろと横たわっている状態であった。その結果、戒律の復興を求める僧侶が台頭する。このような改革派ともいべき僧侶たちは、禅宗（特に臨済宗）や律宗（もともと戒律を学ぶ宗派であった）の僧侶たちであり、彼らを禅律僧という。鎌倉時代に禅宗、特に臨済宗が台頭したのは、こうした理由からであった。

(5)「顕密仏教」と「禅律僧」

顕密仏教の説明からも理解できるように、顕密仏教は、南都仏教+天台・真言を総称したよび方であり、古代以来の関係から朝廷（天皇・上皇）が保護・統制をし、顕密教団の僧は、国家的法会の執行をしていた。一方、禅律僧は、新興勢力である幕府が保護・統制をしていた。つまり、禅律僧は、幕府の支配を正当化する護持僧であった。承久の乱、元寇を経て、朝廷の力が弱まり、幕府が両者の管理・統制を行うようになる。特に元寇の際、幕府は、顕密教団・禅律僧に敵国降伏を祈るように指示した。

(6)異端派・少数派として新仏教

易行・専修・選択の特徴を持つとされる新仏教であるが、これまでの仏教を完全に否定し、全く独自の教えを説いたものではない。例えば、念仏を唱えることが、易行だと言われるが、念仏は、「南無阿弥陀仏」の六字を唱えるが密教では、「阿」の一字で往生を説く。また、悪人正機説は、親鸞の教えとして有名であるが、そもそも顕密仏教の教えの中には、地藏菩薩が善人より悪人をまず救済するという教えがある。また、弾圧を受けた法然であるが、彼は念仏を説いたから批判・弾圧されたのではなく、「専修念仏」を説いたから、弾圧されたのであり、念仏一般への批判ではない。日蓮は、法華経の信者以外はすべて批判したから弾圧されたのである。こう考えれば、いわゆる新仏教の教祖たちは、純粋な形でその教えを説いたといえるが、逆に自らの教えの一元化・絶対化を意図していたともいえる。

1)浄土宗

美作国の押領使の子として生まれた**法然（源空）**は、浄土教の流れを受け継ぎ教団の形成を行った。彼は15歳で比叡山に入り、修行を通じ、念仏以外に救済の道がないことを確信した、難しい学問や修行を難行として退け、ただ阿弥陀仏を信じ、その名号を唱えることだけが救済の道だという法然の教えは、九条兼実の求めに応じて記された『**選択本願念仏集**』で明らかにされたが、この教えは従来の教団（顕密教団）から疎外されてきた人々に強い感銘を与えた。代表的な信者には、今あげた九条兼実や、幕府の御家人熊谷直実らがいる。しかし、法然門下の中には熱狂的な信仰の余り、法然の意図を超え、公然と破戒を行う者もいた。そのため、顕密教団側から激しい批判がなされ、1207年、法然とその門下は弾圧を受けることになる。この時、法然を厳しく批判した人に、興福寺の僧貞慶（解脱上人）がいる。彼は『興福寺奏上』を著し、厳しい批判を行った。法然教団ではこの弾圧を承元の法難とよんでいる。

2)臨済宗

法然とほぼ同じ頃、天台の学僧の中に中国の禪に注目する人たちが現れた。その代表が**栄西（明庵）**であった。彼は2度にわたり入宋し、臨在禪をもたらした。栄西も顕密教団から非難されたが、『**興禅護国論**』を著し、戒律を重んじることを強調し、弁明を試み、後には顕密禪との一致を説いた。また、栄西は『喫茶養生記』を著し、茶の効用を説いた。栄西の禪は、公案と不立文字（悟りは文字や言葉ではなく、心から心へ伝わる）というもので多分に密教的な思想を取り込んだものでもあった。しかし、幕府の幹部、北条氏などの帰依を受けた。栄西の死後も、北条時頼の帰依をうけた蘭溪道隆は鎌倉に建長寺を造った。同じく、北条時宗の帰依を受けた無学祖元は、鎌倉に円覚寺を造っている。なお、栄西は源頼家から土地を与えられ、京都に建仁寺を造り、鎌倉にも寿福寺を建立している。

3)浄土真宗

法然や栄西の教えをさらに純化した人々が、承久の乱の頃に教団を形成しはじめる。まず、法然の弟子**親鸞**は、再三にわたる弾圧の中で法然の教えをさらに深め、主著『**教行信証**』を著した。親鸞は、先の承元の法難の際、越後に流され、許された後も関東・北陸一体で布教を続けた。彼がこれらの土地で目の当たりにしたのは、狩猟・漁労を行い、殺生をしなければ生活できない庶民の姿であった。彼は庶民の苦悩を受けとめ、「悪人正機」説を唱えた。親鸞は、法然の教えをより徹底させ、阿弥陀仏を信じ、念仏しようとした時、すでに人は救われるという「信心為本」を説いた。約20年の布教の後、京都に戻った親鸞は多くの著作を著した。親鸞自身は、肉食妻帯し、非僧非俗を実践し、弟子を一人も持たないという活動を続け、教団を形成する考えはなかったようである。

4)曹洞宗

一方、栄西の弟子として宋に渡り、曹洞宗を伝えた**道元**は、ひたすら坐禅に徹する態度（**只管打坐**）を貫いた。道元は、公家の子として生まれ、栄西から禅を学んだが、禅に対する態度は全く異なっている。権力との結びつきを嫌い、遠く越前に永平寺（吉祥山大仏寺）を開いた彼は、ここで多くの弟子を育てた。道元の主著『**正法眼蔵**』はほとんど仮名書きであるが、内容が難しく、弟子の**懷奘**は『正法眼蔵随聞記』で説明している。

5)日蓮宗（法華宗）

元寇が間近に迫った頃、日蓮と一遍が活動しはじめた。安房の漁民の子であった**日蓮**は、法華経こそが真理である主張した。そしておそらく念仏の影響であろうが、「南無妙法蓮華経」と題目を唱えることで救われると説いた。彼は、元寇前夜の社会・政治を観察し、『**立正安国論**』などの著作で内乱・元寇の近いことを強調した。また、徹底して他宗を批判し、「念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊」と述べた。こうした日蓮の活動は反発をよび、幕府は彼を伊豆・佐渡に配流した。

6)時宗

一遍（智真）は、伊予国の豪族の子として生まれ、比叡山で学んだ後、浄土宗の西山派に入った。一遍は時衆とよばれる信者と共に全国を遊行し、**踊り念仏**を催し、布教した。彼は死の直前、すべての著作を焼いてしまったため、著作はない、彼の姿は、「**一遍上人絵伝**」に詳しく描かれている。

7)顕密教団（旧仏教）

以上述べた新興教団の活動に影響され、顕密教団の方でも、これまでのあり方に反省を行う人々が出てきた。法然を批判した貞慶については触れたが、華嚴宗の**高弁（明恵）**法然批判の書『**摧邪輪**』を著した。彼らは、戒律の復興に努めた僧侶であった。また、律宗の僧たちは、慈善救済を行った。西大寺の僧**叡尊（思円）**は戒律の復興に尽力すると同時に、律宗の考えに基づき救済活動を行った。叡尊の弟子**忍性（良観）**も鎌倉極楽寺の開祖となった人物でもあるが、東大寺の近くにハンセン病患者救済のための施設「北山十八間戸」を建てた。

③神道

神道は神仏習合によって仏教の背後に追いやられてしまった状態であった。しかし、伊勢神宮の外宮の神官であった度会家行は、反本地垂迹説の立場を取る伊勢神道をはじめた。彼は、『**類聚神祇本源**』を著し、神道の仏教からの独立を説いた。

④建築

宋文化の影響を最も受けたものが建築である。1181年平重衡により焼失した東大寺をはじめとした寺院の復興が契機となった**大仏様**は、重源が中国の**陳和卿**の協力を得て、日本にもたらした様式で、東大寺南大門に見られる巨大な木組みの美しさを誇ったが、その後の建築に生かされることはほとんどなかった。**禅宗様**も宋から伝わった様式である。勾配の強い屋根と細かな材木を使い美しさを出している。円覚寺の舍利殿がその代表である。この大仏様と禅宗様に日本風の和様をあわせたものを折衷様という。河内の観心寺の金堂がそれである。さらに、和様では、蓮華王院本堂（三十三間堂）がその代表である。

⑤彫刻

彫刻は、奈良仏師の慶派の活躍が目立つ。**運慶・快慶**によって作られた**東大寺南大門金剛力士像**はとりわけ有名である。運慶自身の作品では、法相宗の開祖無著とその弟子世親を彫った**興福寺の無著・世親像**がある。快慶のものとしては、**東大寺の僧形八幡神像**がある。運慶の長男湛慶は、**蓮華王院本堂の千手観音像**を作った。三男の康弁は、**興福寺の天燈鬼・龍燈鬼**というユーモラスな鬼の姿を彫っている。四男の康勝は、六波羅蜜寺の空也上人像を作っている。なお、鎌倉時代の彫刻は、写実性が豊かで、眼にヒスイやガラスなどを使っている。これを玉眼という。

⑥書道

伏見天皇の皇子尊円入道親王が、宋風の書道を取り入れ、新たに青蓮院流を開き、後世の御家流のもととなった。

⑦工芸

武士の台頭によって甲冑や刀作りが盛んとなった。明珍は、甲冑作りの名手として知られている。刀剣では備前の長船長光や京都の粟田口吉光、鎌倉の岡崎正宗が有名である。また、製陶では、道元と共に宋に渡ったという逸話がある加藤景正が瀬戸焼をはじめた。

⑧文学

文学では和歌に代表される貴族の文学と、軍記物語に代表される武士の文学がある。まず、和歌では、後鳥羽上皇らの『**新古今和歌集**』がある。後鳥羽は1201年、宮中に和歌所を設け、藤原定家・藤原家隆らを招きこれを編纂した。また、3代将軍源実朝は『**金槐和歌集**』を作成している。「金槐」とは、金=鎌倉の「鎌」の偏を、槐=右大臣の意味で、鎌倉の右大臣という意味を示している。

次に隠者の文学とよばれる作品について。元西面の武士であった**西行**は、出家して諸国を遍歴した後、1570首の和歌をおさめた『**山家集**』を著した。**鴨長明**は、京都日野山にこもり『**方丈記**』を著した。これは源平の争乱後の状況を記した作品である、さらに、**吉田**

兼好は、南北朝の内乱直前に『徒然草』を著した。

軍記物語の代表作は、『平家物語』である。『徒然草』第 226 段には、信濃前司行長が記したと書かれているが、作者ははっきりしない。この作品を盲目の琵琶法師が語り伝えた。さらに、説話集では、『今昔物語』に漏れ落ちた作品を補うという意味で名づけられた『宇治拾遺物語』、橘成季が日本の古今の伝説を集めた『古今著聞集』がある。作者は不明だが、10 の年少者向けの説話を集めた『十訓抄』、無住が記した仏教説話『沙石集』などもある。

交通の発達により紀行文も記された、藤原定家の子為家の妻阿仏尼が実子と継子の所領争いの解決のために鎌倉に行った際の記録『十六夜日記』には、洲俣河＝長良川の浮橋や天竜川の渡し舟の状況が記されている。作者は不明だが、京都と鎌倉との往復について記された『東関紀行』には尾張の萱津宿かやつで開かれた定期市のことが記されている。

歴史では天台座主慈円の『愚管抄』がある。これは、史実の中に道理を求めるという立場で記されており、単なる歴史書ではなく、歴史哲学書というべきであろう。また、幕府の公的な記録『吾妻鏡』や九条兼実の『玉葉』は、幕府の動向を知る上で欠かせない史料である、『大鏡』以来の歴史物語には、『今鏡』、『水鏡』などがあるが、『大鏡』をしのぐだけの作品ではなかった。

⑨教育

この時期、教育機関はさほど発達したわけではない。北条実時は、武蔵国称名寺内に古典を集め、金沢文庫を作った。また、鎌倉末期には宋学＝朱子学が禅僧によりもたらされた。その大義名分論が、大覚寺統の貴族に受け入れられ、倒幕運動の理論の一つとなった。

2. 室町文化

①特色

室町文化の特色は、①武士の地位が確立したことによって武士独自の文化が生まれたこと。②町衆・惣村などの発達により庶民文化が一層広がり、文化の地方への普及が見られること。但し、文化の中心は京都であり、京都の二条より南の鴨川の河原に多くの芸能者が住み、「二条河原の落書」で「京童きょうわらべ」と記された人々であった。③中国（宋・元・明）の文化が流入し、影響を受けた。

②南北朝文化

内乱期の世相が反映された歴史書や軍記物語が著されたことと、公家の文化としては有職故実書が記された。

軍記物語としては、『太平記』をあげることができる。この作品は、後醍醐天皇から後村上天皇までの時代を描き、南朝側の立場に立っている。後に太平記読みによって広く人々に親しまれた。一方、北朝方の作品には『梅松論』がある。足利尊氏を中心とする戦記で

ある。

歴史書としては、北畠親房の『神皇正統記』が伊勢神道の影響も見られ、神代以来の皇位継承の正しい道理を説いたものである。

公家の最後の誇りである伝統文化の担い手という意識は、有職故実書として示された。北畠親房の『職原抄』、後醍醐天皇の『建武年中行事』がある。古典研究では、『古今和歌集』の解釈を師が弟子の1人を選んで伝える古今伝授が行われた。^{とうのつねより}東常縁が宗祇に伝えたのがはじまりだとされている。また、後醍醐天皇の皇子の1人宗良親王^{むねなが}は、『新葉和歌集』を著した。さらに、神道の立場からの『日本書紀』研究がなされ、一条兼良が『日本書紀纂疏』を記した。武士の教養も高まり、今川了俊（貞世）は、『難太平記』を著している。

③北山文化

足利義満の時代を中心とする文化を北山文化という。その代表はもちろん、**鹿苑院金閣**である。もともと西園寺家の山荘のあった北山の地を譲り受け、金箔を押し詰めた三層の舍利殿、いわゆる金閣を含む北山第を営んだ。この金閣は、第1層が寝殿造、第2層が仏間、第3層が禅宗様である。金閣以外には、会所・泉殿などの建物があった。

1)臨済宗

臨済宗は、鎌倉時代と同じく、幕府の保護を受けて発展した。足利尊氏は、夢窓疎石の勧めで天龍寺を建立し、全国に安国寺と利生塔を建立した。また、禅律方を通じて臨済宗を統制した。禅僧の中には逆にこれを利用して幕府の政治・外交顧問となる者もいた。

義満は、宋の官寺制度にならい五山の制を整えた。1368年、南禅寺を五山の上＝別格とし、その下に京都五山（天龍寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺）と鎌倉五山（建長寺・円覚寺・寿福寺。浄智寺・浄妙寺）を置いた。五山の住持の任免や管理のために僧録制が設けられ、その長官である僧録司の初代に

^{しゅんおくみょうは}春屋妙葩が就任した。

今述べたように、この時代禅僧は政治・外交顧問として活躍すると同時に、文化面でも多くの仕事をした。夢窓疎石は『空華集』を著し、義堂周信や絶海中津を育てたことで知られる。彼らは漢詩文を発表した。

2)水墨画

禅僧によって水墨画も盛んとなった、中国から絵画が輸入されて将軍家や禅寺に保管されたが、次第にこれを模写する人が現れた。南北朝期には黙庵・可翁らが出、その後東福寺の殿子（財政担当者）であった明兆は「五百羅漢図」を描いた。相国寺の僧如拙は、「瓢鮎図」を描いたことで知られる。同じ相国寺の周文は「寒山拾得図」を描いている。

（少し休憩。少し余分なことを書いておきます。まず、この絵は、瓢箪^{ひょうたん}で鱈^{なまず}を取るにはどうするか？という禅問答についての絵です。だのにどうして鱈でなくて、「鮎」と書くので

しょうか？答えは、中国では、「鮎」と書いて鯰の意味を示していたからです。鯰という字は日本で作られた漢字なのです。ということが、この絵の模写の説明に書かれていました。つまり、中国では、「鮎魚」＝日本で言う鯰のことをさす。だから、瓢鮎図です。）

◆教える側の先生方がお読みなっているかも知れないことを予想して。

すべてとはいきませんが、授業に現物や、ミニチュア、レプリカ、写真などを持ち込むのはいかがでしょうか？私にそのことを教えてくれたのは、宮内正勝・阿部泉『手に取る日本史教材―入手と活用』（地歴社）でした。そうか、こういうやり方で教えたら、楽しいかもしれないと、私に教えてくれた本です。単なるマニュアル本でないところが、いい本だと思っています。

そこで、少し気をつけて捜してみると、京都にある博物館などには、株式会社便利堂が作成した絵巻物のミニチュアやこの瓢鮎図などが売っています。来迎図もあります。確か、パンフレットか何かで注文し、自宅に送ってもらった記憶があります。私は少ない小遣いの中からこうしたものを購入し、授業に持ち込みました。無論、予備校の授業です。毎年「源氏物語絵巻」を持ち込み生徒の前で右から左に展開しました。初めてなのです。生徒たちにすれば、教科書の部分的な挿絵しか見たことのない彼らにとって、絵が巻物状態になっていることを知るのは、私にすれば、「やった！」「どや！」という少しだけ嬉しい瞬間でもありました。同僚からは、「飛び道具」と言われましたが、それでも、こういう授業は、教える方も結構楽しいものでした。もちろん写真でもいいでしょう。学校によれば、写真集が購入されている場合もあるでしょう。でも、自分用のというのなら、博物館や美術館でパンフレットを購入された時にパソコンのスキナーで読み取っておいたものを使用するとか、もっと言えば、JRや私鉄で仏像などの写真を利用したポスターなど期間が過ぎて、捨ててしまうものをもらうことも可能です。あるいは、朝日新聞社が発行した『週間朝日百科 日本の歴史』や同じく、文化財のシリーズなども結構利用しました。これで少しは無味乾燥とした日本文化史が、やる側の教師にとっても面白くなりませんか。日本史以外では、予備校時代、地理の講師が、授業が始まると同時に海辺で使うビーチボールの世界地図が描かれたものを膨らませ、これが地球だとやっていましたし、もう一人の講師は、黒板いっぱい世界地図を実に綺麗に描いていました。彼の授業の後、生徒がその黒板を消しかけたのですが、あわててやめさせました。丁度アジア太平洋戦争のことを教える授業でしたから、ちゃっかりその地図を利用させてもらいました。こういう工夫？も生徒たちにはウケますし、教師の努力は彼らなりにわかってくれると思います。

3) 芸能

能は猿楽・田楽などが結びついて成立した芸能である。その構成は、謡・舞・囃子からなっている。演じる人々は、古くから座を作り寺社などに奉仕してきた。（だから、座は商業の座と芸能の座がある）なかでも、日吉神社に仕えた近江三座と春日大社に仕えた大和四座が知られている。大和四座は、円満井→金春、坂戸→金剛、結崎→観世、外山→宝生へと発展した。義満は、観世座の観阿弥と世阿弥を保護したことで知られる。世阿弥の著

書には、『花伝書』がある。

また、能のあい間に演じられた**狂言**は、滑稽や風刺のきいた劇である。能は場面に応じて面をつける。その種類は、神・男・女・狂・鬼に大別でき、なかでも女の「小面」は良く知られる。また、室町時代には、能舞台が作られなかったようで、野外に舞台が作られる粗末なものであった。なお、東山文化の時代になると、観世座に変わり、金春禅竹の金春座が義政の支援により栄えた。

④東山文化

8代将軍義政の時代の文化を東山文化という。中心は、**慈照寺の銀閣**である。銀閣とは観音殿のことで、二層の建物である。第1層は書院造、第2層は禅宗様である。これとは別に持仏堂である**東求堂**があり、その中に四畳半の部屋＝**同仁齋**がある。これが書院造として有名である。なお、書院造とは、①部屋すべてに畳が敷き詰められている。②部屋と部屋の間を襖ふすま（襖障子）で仕切る。③天井をはった上、採光のために明かり障子を用いる。④付書院（書見の場所）や違い棚、床などを設ける、などの特徴を持っている。

1) 庭園

建物にあわせて庭園が作られた。水をまったく使用しないので**枯山水**という。大徳寺大仙院庭園や竜安寺庭園が有名で、竜安寺の庭石の一つには「小太良・徳二良」と名が刻まれている。こうした庭園作りや芸能に携わる人々を同朋衆という。彼らは、能の観阿弥・世阿弥、書院造の相阿弥のように「阿弥」という号を持つ人々で、身分は低いが芸能には優れた者たちであった。

2) 新仏教の発展

室町後期になると五山派以外の禅宗各派が栄えてきた。とういのも、五山派じゃ権力と結びつき、庶民から浮きあがってしまったからである。これに代わり林下りんかと総称される五山派以外の禅宗が盛んになった。同じ臨済宗でも、大徳寺・妙心寺が栄え、曹洞宗も広がった。特に曹洞宗は永平寺と総持寺の2つを本山とし、栄えた。

庶民が受容した教えは、禅宗の五山派以外のグループだけでなく、日蓮宗と一向宗（浄土真宗）もある。日蓮宗は、主に京都の庶民に受け入れられ広がった。なかでも、僧日親は、足利義教に『立正治国論』を提出したため、その怒りに触れ、焼けた鍋をかぶせられたことから「鍋冠り上人」ともよばれた人物で、彼の熱心な布教によって京都の町衆は信者になっていった。

一方、一向宗は、鎌倉から室町時代前半には本願寺以外の仏光寺派や専修寺派が勢力を持っていたが、本願寺第八世**蓮如**が、平易な手紙（消息）と講という信者組織を作り、畿内から北陸地方に信者を広げた。

3) 文学

この時期に**連歌**が盛んになった。連歌は、和歌の5・7・5の上の句と下の句を読み合わせ全部で100首作るという合作文芸である。これが庶民の中で盛んになったことは、「二条河原の落書」にも記されているとおりである。

1356年、二条良基は、『^{つくばしゅう}菟玖波集』を著わし、準勅撰とされた。良基は、1372年には連歌の規則書でもある『応安新式』も記した。この後、応仁・文明の乱の頃、宗祇が登場する。彼は、肖柏・宗長と共に『水無瀬三吟百韻』を作った。これ以外に、『新撰菟玖波集』を作り、正風連歌を確立した。連歌はその後、形式にこだわり庶民性を失っていった。これにかわり俳諧連歌が起こってくる。その代表は、山崎宗鑑で『犬筑波集』を著わしている。なお、連歌に共通する「つくば」とは連歌の別名のことである。宗鑑の『犬筑波集』は、「犬」で犬の動き、ユーモラスな動き＝俳諧を、「筑波集」で連歌を示している。

連歌以外にも庶民が愛好した文芸は、『お伽草紙』である。庶民生活に題材を求め、絵と話し言葉によって記されたもので、武士を主題とした「酒呑童子」（以前に紹介したエピソード参照）や、庶民を主題とした「文正草紙」・「物ぐさ太郎」・「一寸法師」が代表作である。

また、『閑吟集』は、16世紀はじめにできた小歌集で、恋の歌が多数掲載されている。

4) 水墨画

水墨画は**雪舟**が大成した。雪舟は、山口の雲谷庵で画筆をふるった。「山水長巻」とよばれる「四季山水図」や「天橋立図」が知られている。

5) その他の芸能

南北朝以来流行した闘茶は、茶を飲み比べ、本茶＝京都梅ノ尾の茶か、非茶＝それ以外の茶を分け優劣を競ったが、一休宗純の影響のもとで、村田珠光が侘び茶に高めた。これがさらに武野紹鷗に受け継がれた。

花道は、はじめ仏前に花を飾ることからはじまったが、池坊専慶が出て、茶室の花が飾られるようになった。